

禪の友

Zen no Tomo

8

August 2019

特集 お盆・朝課



選・坊城俊樹

太白の雲に隠るる螢の夜

鳥根県 藤江堯

評「太白」とは「太白星」のことで、金星のことである。この言い方を見ると、金星に表情というか、感情のようなものが付与される。それが隠れた際の、螢の夜の切ないような情感とみごとに呼応しているのである。

石一つ大山に積む山開

山口県 御江恭子

評「大山」は鳥取県の大山のことか。霊峰の山開きは賽の河原あたりの登山口で為されることが多い。ケルンとしての石を一つ積むことで、これからの登山の安全を祈願する。石という極小と大山という極大の比喩が見事。

◆ 鐘つけばこだま銜のせくる落花かな 岩手県 鈴木道昭

◆ 一礼しボールを拾ふ植田かな 三重県 西村廣視

◆ かくの如怒りてみたしいなびかり 兵庫県 崎長淑子

◆ 春潮や鳥を出る子へ両手振り 岐阜県 大下雅子

◆ 藤棚の風むさらきに動きけり 東京都 長谷川瞳

◆ 長閑けしや釣り竿雲を釣つたまま 東京都 鈴木英治

◆ 蝌蚪かたどの池静寂破り歛洗ふ 京都府 藤原昭孚

◆ 秋の空群なして鳴くマリタカよ サンパウロ 斉藤明子

◆ 薰風や三種の神器捧げ持つ 神奈川県 佐野 勇

◆ 大手門入るや深紅の木瓜の花 神奈川県 池亀恵子

選者吟

象花子耳朶やはらかく星流れ 俊樹

作句小見 象の花子とは、井の頭自然文化園にいたインド象のこと。少し前に死んでしまった。たぶん、すごい長寿で日本の象の最年長だったかと。夜の動物園と花子を思いつつ、老いた耳たぶに鎮魂の星が流れることを想像した。

選・長澤 ちづ

古希過ぎて友らいよいよ元氣なり物言う
たびにどつと笑いぬ

山口県 濱田 道子

評 古希は古稀で唐の杜甫の詩「人生七十古来稀」から七十歳のこと。「稀なり」どころか最近の七十代はとても元氣。その証拠に、誰かが何か言うたびに一斉に笑うと詠う。笑うことが心身共に活力の源という発想と表現が相俟って力強い。

令和初日の新聞紙にてお節句の兜を折り
ぬ外は糠雨

兵庫県 前田 あつ子

評 五節句のうちの端午の節句は男の子の健やかな成長を祝う日。「令和」の新元号が、五月から始まったことと丁度その時期の端午の節句とを取り合わせて双方を二つながらに寿ぐ。

- ◆ 旅人の喧しきが今帰仁に来ればそれぞれ無口になりぬ
島根県 横山 稔吾
- ◆ 閑上ひらあげのにはひはこれと目を瞑り浜風深く何度も吸ふ娘
宮城県 須藤 智恵子
- ◆ 外置きひらの傘を開けば花びらの散りて知るかな時の移ろい
埼玉県 丸山 劫外
- ◆ 新緑の抜さん出て立つ樟大樹苑の真中に位置を占めたり
東京都 長谷川 瞳
- ◆ 廃校のぶらんこ風に揺れるだけ子らの歓声大空に消え
鳥取県 眞山 博充
- ◆ 早口で話す言葉は解らねど百舌もずのおしやべり胸を打つなり
福島県 佐藤 忠
- ◆ 今朝摘んだ山菜土間で仕分けたり義母もこうして春を揚げた
秋田県 小松 紀子
- ◆ 明治の雛昭和の雛壇飾り付け孫らと平成最後を祝う
京都府 内田 孝子
- ◆ 互いに刈りあい分解注油しカバーかけ箱に収めし父のバリカン
三重県 西村 廣視
- ◆ お道具はさしたるものでないけれどお菓子はこると妻のお茶会
静岡県 末光 愛正

選者誌

大輪の薔薇園巡り来たる目にわが家の野ばらの
白のすずしさ

ちづ

作歌小見

物を大切に扱った時代の象徴のような西村さんの「父のバリカン」、義母の「春の揚げ方」を今もそのまま做う小松さん、東日本震災の被災地閑上の句いを確かめる里帰りした須藤さんの娘さん、どれもなつかしい空気をまとう歌です。



ご本山だより
大本山永平寺
【燈籠流し】

大本山永平寺 ☎〇七七六・六三・三一〇二一



残暑の中、草取り作務のひと休みに木陰で一息ついておりますと、ふと、人だかりができているのが目に留まります。よく見ますと、暑いので皆が自然に木陰に集まっているのです。額に汗を光らせながら作務にはげみ、修行仲間と仲良く過ごす雲水方の姿を見ておりますと、なんだかこの暑さも有り難く思えてまいります。

さて、本年も山麓を流れる九頭竜川^{くずりご}では、皆の安心を願う大燈籠流しが営まれます。夕べになりますと、涼やかな川の音が響く河川敷には多くの方々がお参りになられます。大燈籠流しでは、永平寺の役寮と雲水が「大施食^{だいせ}」のおつとめをし、その後に願い燈籠や供養の燈籠を皆で川に流します。「大施食」とは、すでに亡くなった

多くの皆さま方、また今生きているすべての生きとし生ける皆さま方、そしてこれから生まれ来る皆さま方などあらゆるものをご供養するものでございます。ひとつ空の下、皆が心ひとつに互いの幸せを願う時に、温かく優しい仏さまのところがそれぞれの姿に灯るのだとここに留めているものであります。

そろそろと流れゆく燈籠に手を合わせるそれぞれの姿に、人を思うまごころと、無常の世を生きる寂しさ悲しさを観るものでございます。二度とない有り難いこの一息一息を、皆で手を携え合い、仲良く生きていきたいものだ^だと心より願うものでございます。
南無釈迦牟尼仏^{なむしゃかむにぶつ} 南無釈迦牟尼仏^{なむしゃかむにぶつ}



ご本山だより

大本山總持寺 【總持寺の夏】

大本山總持寺 ☎〇四五・五八一・六〇二一



放光堂前に植えられたアジサイ

八月は、修行僧の多くが師寮寺（師匠のお寺）へ旧盆手伝いのため、数日間の他出（帰省）をいたします。

特に、今春新しく上山した修行僧にとりましては初めての他出となり、たくましく成長した姿をお師匠さまや寺族・檀信徒の方々に見ていただく好機会ともなります。

旧盆が終わり、修行僧が他出から戻ってくる、山内は再び活気に溢れます。

二十三日から二十五日は参禅者対象の「夏季参禅講座」です。テーマは「相承（そうじょう）受け継がれし御両尊の御心」で、御両尊（瑩山禪師と峨山禪師）の御心を相承し總持寺を支えて来られた歴代祖師方、そして總持寺を石川県輪島市から横浜市鶴見区へ移転なされた石川素童禅師の教えを学びます。

また十一月の石川禅師百回御遠忌を控え、法要のみならず様々な記念行持が予定されており、その準備にも取り掛かります。

下旬には「祖蹟巡拝」が行われます。バスでの二泊三日の山外研修であり、修行僧が毎年楽しみにしている行持です。

この巡拝で、御開山さま・二祖さまゆかりの地や寺院を訪ねて曹洞宗や總持寺の歴史を学び、その教えが脈々と自分たちに相承されていることを実感するのです。

さて、昨年八月号で紹介しました「紫陽花の挿し木」を境内の各所へ移植しました。大きく育って将来、總持寺が「アジサイ寺」「お花の寺」として人々に親しんでいただければ幸いです。